
月 刊

Mélange

VOL.74



ロルカの詩を新たに翻訳して朗読する鼓直氏

2012.08.18

第15回 ロルカ詩祭 書き下ろし作品集

・ 攝津幸彦 作品 合同句評

月刊 「Mélange」 VOL.74

2012/08/18

月刊 「Mélange」 編集部

翻訳詩

老いぼれトカゲ／キューバの黒人たちのソング……………ガルシア・ロルカ作／鼓直訳 03

自作詩

(今号に掲載した作品は、朗読された作品の中で、今回の詩祭のために書き下ろした詩です)

繁茂する―声のためのテキスト ver. 2012.08.18……………安西佐有理 06

お願いジャムを続けて……………大橋愛由等 08

ベトナムにて抄……………高木富子 10

清らかな月……………中堂けいこ 11

ゆくえ／見えない城……………富哲世 12

攝津幸彦・合評

(9月8日へ土)に神戸文学館で行う「1970-80年代の俳句ニューウェーブ〈攝津幸彦〉を読む」に参加する
パネラー四人による攝津作品の合評の一部です)

攝津幸彦作品〈比類なく優しく生きて春の地震〉〈露地裏を夜汽車と思ふ金魚かな〉

……………大橋愛由等／岡村知昭／中村安伸／堀本 吟 14

エッセイ

神戸詞あしび(北朝鮮に帰還したひとびとのこと)……………大橋愛由等 16

★(今号の表紙から13頁にいたるまでの写真は高谷和幸の撮影によるものです)

◆老いぼれトカゲ

フェデリコ・ガルシア・ロルカ

(一九二〇年七月二十六日)

八月の夕暮れの
ぼんやりとした幻が 既に
地平線から覗いているというのに。

息絶え絶えの空の
青い施しを受けたいのですか？

星くずの鏝銭を？

それともひよつとして

ラマルテューユの詩集に

学んだのかな？小鳥たちの

しるがねの囀りが

お気に召したのかな？

(夕陽を眺める

あなたの眼は、

ああ カエルたちの竜王よ！

人間めいた光で閃いている。

思念の權を失った

ゴンドラが、あなたの

焼けただれた虹彩の

暗い水を渡っていく)

きつと探しに来られたのでしょうか。

五月の

小麦のように。

眠る泉の

長い髪のように、緑の

美しい雌トカゲを？

あなたを冷たくあしらい やがて

草叢から出ていったあのひとを？

夏枯れの野道で
何やら考え込んでいる
(クロコダイルの滴)
お人好しのトカゲを見かけた。
それらしい悪魔の助祭の
緑のフロックコート、
生まじめな表情に
アイロンの利いたカラー、
いかにも老教授めいた
哀つぼいすがた。
失意の芸術家のような
あの生気のない眼で
色も褪せた
夕べの空を眺めている！

おや教授、夕方の
これは散歩ですか？
ステッキをお使いなさい。もう
お年でしよう、ドン・ラガルト。
それに村の子供たちが
威しをかけるかも知れない。
こんな小道で何を求めているのです、
眼の悪い哲学者さん？

ああ みずみずしい管の葉のうえて
 破れた 甘やかな恋よ！
 しかし生きなければ！ 何のこれしき！
 ぼくは昔からあなたが好きだった。
 「断固として蛇と
 闘う」という威勢のいい文句が
 キリスト教の大司祭めいた
 その二重あごに書かれています。

山のいただきに
 既に夕陽は消えて、
 家畜の群れによつて
 道はごつた返しています。
 お家に帰る時間でしょう、
 こんな狭い道にいてはいけません。
 それによくよ考えるのは
 もうおよしなさい。
 星を見つめる場所くらい
 いずれ持てますから、
 蛆虫たちが急ぐことなく
 あなたを貪るころにでも。

コオロギたちの村の下手の
 お家へ帰りなさい！
 それじゃお休み
 ドン・ラガルト！

既に野原には人影がない。
 山々の影は薄れて
 道ゆく者もない。

ただ時おり
 ポブラの
 暗い茂みで郭公の音がする。

◆ キューバの黒人たちのソング

フェデリコ・ガルシア・ロルカ

満月になったらサンチャゴ・デ・クバに行こう、
 サンチャゴに行こう、
 黒い水の馬車に乗って。
 サンチャゴに行こう。
 椰子の屋根が歌うだろう。
 サンチャゴに行こう。
 棕櫚がコウノトリになりたがる頃、
 サンチャゴに行こう。
 そしてバナナが水母になりたがる頃、
 サンチャゴに行こう。
 サンチャゴに行こう。
 フォンセカの金髪の頭を抱いて。
 サンチャゴに行こう。
 そしてロメオとジュリエットの薔薇を抱えて
 サンチャゴに行こう。
 紙の海と銀貨、
 サンチャゴに行こう。
 おおキューバ！ おお乾いた種のリズム！

サンチャゴに行こう。
 おお熱い腰と樹のしづく！
 サンチャゴに行こう。
 生木のハーブ。カイマン。タバコの花。
 サンチャゴに行こう。
 僕は言ってきた。サンチャゴに行くぞと、
 黒い水の馬車に乗って。
 サンチャゴに行こう。
 車輪には微風とアルコール、
 サンチャゴに行こう。
 闇のなかの僕の珊瑚、
 サンチャゴに行こう。
 砂に溺れた海、
 サンチャゴに行こう。
 白い暑さ、死んだ果実、
 サンチャゴに行こう。
 おおサトウキビ畑の牛の涼しき！
 おおキューバ！ おお吐息と泥の曲線！
 サンチャゴに行こう。

◆ 鼓直（つづみ・ただし）

一九三〇年、岡山市生まれ。五一年、東京外事
 専門学校(現・東京外国語大学)卒業。神戸外国
 語大学勤務を経て、法政大学名誉教授。著書に
 『ラテンアメリカの小説の世界』(北宋社)があ
 る。訳書の主要なものはボルヘス『伝奇集』
 (岩波書店)、ガルシア・マルケス『百年の孤独』
 (新潮社)、ドノソ『夜のみだらな鳥』(集英
 社)、ブイグ『アエノスアイレス事件』(白水社)
 など、他に『現代メキシコ詩集』(土曜美術社
 出版販売)、『ロルカと二七世代の詩人たち』
 (土曜美術社出版販売)の編訳もある。近刊の
 訳書に『プロデューの報告書』(J・L・ボル
 ヘス著、岩波文庫)がある。

◆ 繁茂する―声のためのテキスト ver. 2012.08.18

安西佐有理

白いタイル(だった)床に
刈りとっても刈りとっても芽吹いてくる
くろぐろとながながと髪の毛が伸びひろがる
キツタを凌ぎ、ナズナを枯らし
対岸まで打ち寄せられ増殖して繁茂して取り去れない

ミワタスカギリ(連鎖する擬音)
イチメンノ(いいえ、いいえ)

こまぎれの 声のまつり

くろい髪(である)うねりの中洲には
もはや安心できない白い飯粒を
失ったメトロノームに合わせて
手元に目をやらず口へ運ぶ、父たちが(あった)

ふつうが臍に落ちたふりをするアナタとアタシは仲良くなって
白いタイル(である)床を覆う髪が脈打つのを
まだある足裏の輪郭で感じながら
毒が百パーセント取り去られた透明に湯を注ぎ
ゆつくりと紙で濾して、飲む

どちらか死ぬまで、ともだちでいようね

くろい髪(だった)川を臨む高台には
あいかわらず皿に残った灰色の脂をパンでぬぐって
口に運びもしながら
未知のメトロノームに合わせて
刈りとつた髪で毛綱を編みたい、母たちが(ある)

ケツナ、キツタ、キズナ、ナズナ
からみついでころすのは、どれかな
たべておいしいのは、どれかな
イノセントにハミングしながらそだち、やがてかれるのは、どれかな
つい飯粒やパン屑の匂いを嗅ぎつけてしまう
アタシ(たち)はケツナでキツタでキツナでナズナ
からみつかれた壁、覆い隠された空き地
引き抜かれ食べられた体

父たち母たち弟たち妹たち
姉たち兄たちアタシの玄孫たち
祖母たち曾祖母の兄たち高祖父の従弟たちも

視線の先は中空の画面
顧みられない真は空や土の幻想がしまわれたまま髪の毛の渦に持ち去られ
一方で目前に映されたどこかの町の、髪一本ないクリーンな道路には
この時間はこのようなニュースを中心にお伝えしていますと言われても
すでに聞き流した事件と同じく
天も地も、はじまりもおわりも(なかった)
それにひきかえ無用で禁止され不穏な
たのしい今夜のアタシ(たち)の町
焦げるような臭いまでが
駅前を侵食しはじめているらしい

いやなおいがするなあ
もやされているんだろう
あぶなそうだね
おれらのからだは
わらいながら、たおれていくんだな

そして画面に触れてしまった指紋の溝を
くろい煤が、べつたりと埋める

九十九パーセントの毒の成分は、安全な
超臨界流体によって除去しています
さらに加工すれば百パーセント取り除けます
味は正直なところ大抵、昔ながらの毒より劣ります
けれどもこの毒は、ふつうに美味しいですよ

ケツナでキツタでキツナでナズナ(である)(だった)(だろう)
それは、アナタでなく一人称単数のアタシ(たち)の
すでに存在しない秘密

約束がほどけ
頸に臍の緒が巻いた痕をのこしてほほ笑む
ネオテニの夕べに
髪の毛の流れる漕ろうと(した)方舟はしずむ
アタシ(たち)の灰をおさめたはずの、小箱の底は抜け
宇宙があかるく広がって(いる)

〈飛び出せ〉
〈着火せよ〉

こまぎれの 声(風いだ)
せいせいした景色の一部だ
アタシは
ここは



そして他の娘らは／自分の編毛に追われて走る／
黒色火薬のバラの花が／爆発している風の中を
(フェデリコ・ガルシア・ロルカ「スペイン治安警備隊
のロマンセ」)

*それは、書かれた後に現れた。

◆お願いジャムを続けて

大橋愛由等

母が眠る墓所を
往復する歩行時の
一つの痛点が
すべての事象を
包摂して
港からの汽笛を
呑み込み
ありとある意味が
沈黙のしじまと
化してしまった
その街のその夏

(墓に生える夏草の一本ずつを引きぬいて押し花にしていたわ

もうこれからは
上から三段目の
書棚を棲み家にするの
と決めてかかり
ずつとそれから
閉じこもり
その棚は
外^と国の文学書に満たされ

蝉取りでつかれて
寝入ってしまった夢のなかであったのか

(行方不明が憧れとなったのはこの時からだったのだけれど

険しい目付きの
侵犯男たち
の一人は
父の書肆で時折り見かけ
上から四段目の
通俗小説の棚を
いつもいじくっていたのを
侮蔑のまなざしで
見ていたことを
男も覚えていて
サイボウ サイボウ だのと
同僚が押し殺して
言い合っているなかで
何も語らずにいて

(その男たちは背負っていたわ、計れるもの計れないものを

逃げまどい
たどり着いた
そこもここも
先に到着した者たちに拒まれ
劫火の街をはいずりまわり
はいずりまわった19歳
開けた朝は
そこそこは
焼けただけ

渡海の言語を媒介する
翻訳者の言葉しか
しゃべらなくなってしまったわたし

(そこに書かれた言葉しかそこにはないのよ

ふと思い出すのは
港町を通り過ぎた
あの二人のこと
あの日
父はとびきりこわばった顔をみせ
平静を装う母と
大人の仕草の姉がいて
家族でひとつのヒミツに生き
わたしはなにも聞き出せずに
岸壁に向かう時の
父の風見の癖を見出していて

(その二人が詰め込んだトランクの中は何色だったか知っていたけど

「ごめんよ、
もうみつちゃんに
お話ができなくなっちゃった」
と南に還っていくフェデリコおじさん
見せたあの夏のあの顔
10歳のわたしには美麗すぎて
「しんじやうよ、やだよ、おじさん、
南に還らないで、
この街でくらそ」
と言えたのは
白糸露人の男の子たちとの

そこそここに
いた者たちは
この街の不在者と
なっていて

(ああスカートがはきたい、パンのない朝食なんてもううんざり

焼けただれたこの街にも
やがてジャムは流れるだろう
「みつちゃんのために
ずつとジャムを演奏していたよ」
ジャズメンのやさしい声にする
でも
母もいず
姉は去り
フェデリコおじさんが帰ってこない
この街を離れよう
そう
あえかな潮風に浸り
山際の深き稜線に映える
緑を感じできる
この街に還ってくるために
この街を離れよう

(還ってくるわ、フェデリコ・ガルシア・ロルカおじさんに、もういちど会えるかもしれないから



◆ベトナムにて抄

高木富子

ハノイ

祖霊にしつぽ捉まれ 彼らに連なり
黒漆の祠堂の薄闇に 今わたし一人
床に埋め込まれたアルケタイプの逆転写
祖霊たち、よ ズシリ 掌に受けるにはあまりに重いが・
つるり ゆで卵のよう 逆撫でも頼りない

埃たつ往還に姿一つなく 炎天の下 砕け散ってしまった
ズブズブ泥濘に脚とられ 雨空の下 溶け消えてしまった
片翳りの思いが脳髓を駆け巡る (わたしは 何故遇ったのか)

露台上に登れば 無窮の空 無尽の人
ざわめき ひしめく 長い記憶の帯が光る

ホイアン

男は一点に目を凝らし貝を削っていた
象嵌細工の貝殻 その粉塵に日長を暮らす
額の翳は青く 委縮した脚の
その人は 白々の真昼にうづくまる

鳳凰木の赤が燃え 薄紫のハンランが垂れ
丈高い檳榔樹 沼を覆う蓮
荒れ土に生え茂り 荒れ土を隠すものたちの
六月の訪れ 雨期が始まった 三十年

心の底をたたく
鱗剥ぐように振り落とし
解きがたい悲しみを脱ぎ



◆清らかな月

中堂けいこ

わたしは八月を飲み下せない

身のほどの窪みを掘る犬が 身を横たえて三日
暗がりから夏の日差しが照りかえる庭やわたしの足元を見ている
ときおり板敷きの隙間から犬の胸が上下するのを確かめる
掘り起こした黒土がやわらかく身体を包み直しているようだ
その日の明け方 犬が芝草の向こうで尻尾を振っていた
あんなに元気になって 三日も食べなかつたから

チャム缶を開けていると眼が覚めた
午後に胸が止まり 犬の名を呼ぶ犬の名を呼ぶ
前足で空をかいて
それから真夏の芝草に走りだした
盆参りの坊主の読経でわれに戻る
あの夢は犬の挨拶だったのだな

八月に産まれた者はこの月を飲み下せない
遠くからいつぱいやつてきて
とても親しげにわたしたちを取り巻く



◆ ゆくえ

富哲世

手首に赤い草の実を着けて
夏が日盛りのポストを曲がついていった
ぱたりと途絶えた音信の人が
レースの日傘を差して
不思議な音色を踏むように
道の向こうのガードレールの勾配をのぼってゆく
アスファルトの藪を嗅ぎ分けて走る
いぬの明るい迷走は
やがて温熱の暦に変わるにんげんのたどたどしい足音を
溺れる者らの慌しいいち日に繋ごうとしている
小鳥の笛の鳴り止まない屋根の上
はためく風の昔や雑木林の外れで
夢はまだ眠ったまま瘦せた灯し火をやさしく囁して
長い長い沈黙の階段を悲鳴のように登り続けているので
まるで出口の見えないあしたの国に
暮らしているかのようだ
ぼくがきみに会えないように
きょうもどこかですれ違うはずの

◆ 見えない城

富哲世

夜をへだてた丘の上に、果樹園の緑と、空の真青を映して金色に光る水を幾重にも巡らせた、真昼の古城が立っている。急峻の谷底を奔る轟々たる流れと闇の深さを越えて、誰もそこにたどり着くことはできないが、城壁のなかでは、まるで無人の街が奔めく影で賑わうように、パンはしづかに焼かれ、噴き上げはのどかに歌い、石畳を車輪は物思わしげに往き交って、ゆつくりと暮れていく長い一日が営まれている。
時がどんなに隔てようと、わたしがわたしであった昔を離れることがないように、それは今のかたわらに消え難い幻の姿で建っている。思い出に貫かれて、風の間にもふと目覚める、鮮やかなかわしい風景のように。

ぼくはぼくにきつともう会うことはない
時間よ

降り積もる難破よ
すべてに安らぎが潜んでいる
疲れた時の絵姿をほどこきながら
古い鏡が剥がれていく天使の暗い交差点で
果てしない物語のように
遠い歌声のように
泳ぐからだを手離している
さみしむ人の胸苦しさに急ぎ立てられて
叶わぬ願いに寄り添いながら
燃える花の行方を尋ねる幻の舟となつて
だからもう過ぎた世界を
振り向かなくていいよ
灼けた石の棲み家で蝮の番う
夏の繁みを分けて
昔馴染みの笑い顔が
ひよいと姿を現す
隠れた真昼の星の
凶々しい永遠のしるしを帯びて



第15回ルルカ詩祭のこと

朗読者／★第1部(1)アグスティン(2)今野和代(3)鼓直
★第2部(4)大橋愛由等(5)岩脇リーベル豊美(6)寺岡良信(7)福田知子
(8)情野千里(9)永井ますみ(10)夏石番矢(11)高谷和幸
(12)安西佐有理(13)中堂けいこ(14)高木富子(15)大西隆志(16)富哲世
(朗読者の朗読作品は『8月19日詩集 Vol.15』に収録されています)



◆日時／2012年 8月18日(土)

◆場所／神戸三宮 スペイン料理 カルメン

攝津幸彦 露地裏を夜汽車と思ふ金魚かな

『陸陸集』

◆大橋愛由等

〈見立て「AをBとみなす」の句である。動かぬもの「露地裏」が動体（「夜汽車」）であると想起する時の着想が心地良い。私も偶然だが、今年になって似た発想の詩を書いた。街が貨物列車に乗って移動するというものだ。駅前にある書割のような奥行きがない飲み屋街がそっくりそのまま貨物列車の上に乗って夜な夜な彷徨し朝には元の場所に戻ってくるという内容である。そして、攝津はこの句の見立ての観察者として金魚を置いている。すべからず見立てにはオーディエンスが必要なのかもしれない。私の詩でも彷徨う街に、暗渠となつしまつた（擬人化された）川が関わっている。日頃、観察者として立ち現れてきそうにない金魚・川が、見立てという仮構されたものを眺めているという構図は、なにかの暗喩として考えることが出来るだろう。

◆岡村知昭

「露地裏」と「夜汽車」と「金魚」、一歩間違えたらそれぞれの言葉が自分勝手にイメージを讀者に押し付け合つて、なにかもをぶち壊しにしかねないところ、水槽の金魚から露地裏に広がる日々の生活感、夜汽車の窓に流れる街のネオンの輝き、という風に言葉それぞれが落ち着くべきところに落ち着き、読み手の心を様々に揺さぶる一句へと仕上がっているというのは、やはり驚くべきことなのである。ここで注意しておきたいのは三つの言葉を扇の要の位置で束ねる役割を負っている動詞「思ふ」。まず一句が金魚が「思ふ」との骨格のもとに成り立たせる形にあることをはつきりさせ、「露地裏」が「夜汽車」であるとの、二物の関係の

◆大橋愛由等

攝津幸彦、晩年に属する作品。阪神・淡路大震災と結びつけて詠んでみたい句である。多くの他者の、そして自らの、タナトスと対峙し、包み込もうとする作者の姿勢が（「比類なく優しく生きて」）の詩句に結実している。私は、阪神・淡路大震災の激震地のただなかで被災した者として、震災からしばらくひとびとが（「比類なく優しく生きて」）いたことを覚えていた。私もいくつか震災に関する俳句を作ったが、当時はタナトスが隣座する環境のもとで、生き残ったことの確証として、自らの身体の領域のみでしか生きていなかった。つまり世界からシニフィアンが消失し、シニフィエに対する皮膚感覚でしか言葉（表現）との関係性が生まれなかった。こうした言語環境に生きてきた私にとって、この句の（優しく）とは、生そのものへの、いとおしみ以外なものでもないものである。

◆岡村知昭

地震に「なみ」とルビが振ってあるのを見ると、実のところ、あまり大きな地震ではなさそうな印象を受けるのである。だいたい震度三程度までだろうか。春の陽だまり、眠気も襲ってきそうな塩梅のひとつときに感じる微かな揺れ。あれは地震だったと気づいた頃には、すでに大地の揺れも収まり、何事もなかったかのように地震の前と変わりのない陽だまりが目の前に広がっている。日常の中に訪れた微かな裂け目は、この小さな地震が大地が「比類なく」抱え持つ測り知れない力の片鱗なのにもかかわらず、どこか「優しく」感じられてならない。それは微かな大地の揺れが自分を「優しく」包み込んでくれたかのような、甘美なひとと

断絶によって成立する断言は、「思ふ」によって少しだけ勢いを弱くさせられる。こうして金魚の想念にすべてを集めし、上五中七の断言から生じるイメージは、読み手を微妙に刺激しながら、新たなイメージを思わせるよう誘導していく。まさに技術の確かさがもたらした秀吟といふべきだろう。ここまで書いてようやく気が付いたのだが、一句のはじまりはあくまで「露地裏」で、決して「露地裏」ではない。選択の過程はともかく、「露」の「ろじうら」でなければこの一句は成り立たなかった、のは間違いないさそうだ。

◆中村安伸

解釈の上での問題点は「思ふ」の主体が「金魚」なのか、あるいは明示されていない作中主体「私」なのか、つまり中七で切れるのかどうか。中七で切れて「かな」で止めるのは不恰好なので、主体は「金魚」であるという解釈を採用したいところである。夜汽車という比喩から、夜遅くまで明かりが煌々と灯るスナックや居酒屋の立ち並ぶ露地裏が想像できる。「私」は、そのなかの一軒の店で酒を飲んで、いるのだろう。そしてふとこの露地裏のすべてが夜汽車のようだと思つた。カウンターに居並ぶ酔客たちはそれぞれ孤独でありながら、同じひとつの客車に乗り合わせて目的地へ向かっているという一体感が心地良かった。しかし「私」はこのような気障なセリフをそのまま吐き出すことや抵抗を感じた。逡巡した挙句、近くの水槽を泳ぐ金魚にその役割を押し付けてしまったのである。その瞬間世界は歌舞伎の廻り舞台のようにくりと反転し、夜汽車の旅を夢見る金魚のファンタジックな冒険物語がはじまった。もちろん上記は無限に可能な鑑賞のひとつのバリエ

きだったと気づいたからなのだろう。だから私にとってこの一句は「春の地震（なみ）」から引き出された言葉によつて組み立てられた「比類なく」味わいのある作品なのであつて、実際の地震（この一句は阪神淡路大震災のアンソロジーに収められている）を背景にすると、途端に春の地震は「なみ」ではなく「じしん」として立ち現われてしまいかねない。攝津自身が第六句集「陸々集」のあとがきで、昭和の終焉を迎えながら「わが俳句形式の固有の回路に素材として乗り切ることなく、言葉は空転を繰り返すばかりであつた」と率直に述べていることを、ここで改めて思い起こしておきたい。もう「春の地震」を「はるのなみ」とは詠めなくなつてしまった現実が、この一句の読みをさらに微妙な位置に置いているかのような予感、果たして如何に。

◆中村安伸

前書きがあるわけでもないで、作品発表の経緯を知らなければこの句を阪神大震災に結びつけて読む必然性はないのである。震災というフィルターをいったん取り外して読みなおすと、この句の音韻構成の巧みに注目される。「比類なく」と「春の地震（なみ）」の音韻的類似性、つまり上五のフレーズのやや変形したりフレイズとして下五があらわれる。また、地震をあらわす古語「なみ」は「なみふる」が短縮されたものであり、この「ふる」の音が変形して「比類」と「春」に隠れているのである。

一方で「比類なく」すなわち比べるものがないという手放しの表現には、攝津作品には珍しい情念の発露がある。このあたりに、大規模な災害に俳句というある意味最も不利な手段で立ち向かうことへの戸惑いがある

ーションにすぎない。つげ義春の漫画「ねじ式」の世界との関連を指摘する人もいるし、金魚を向島 芸者の源氏名である（これは攝津本人が言ったことらしいが）とするのもひとつの楽しみ方であろう。

この句に関しては誰もが何かを言いたくなる。そして多くの美しい、あるいは奇妙な鑑賞が集まり、議論が生じる。攝津幸彦作品のなかでも最も多面的な話題性に富むこの作品こそ、最高傑作と呼ばれるにふさわしい逸品であり、私の最も愛する作品のひとつである。

◆堀本吟

露地の細道を列車に見立て、飲み屋の金魚鉢の金魚に夜汽車の灯りを想う、主体が「金魚」であれ「私」であれ、誰しも心に抱く過去という懐かしい異界へ誘われる。これらのレトロな言葉のイメージを結びつける着想が卓抜。懐かしさと奇抜な比喩の入り混じった味わいが独特である。構成は「AをBと思ふCかな」は、直喩（あるいは換喩？）法の単純な取り合わせのパターンを用いると誰でも作れるような構成。<http://yukari3434.web.fc2.com/sanbutkun.html>（三島ゆかり（俳句公式HP）では、「俳句自動生成ロボット三物くん」が（「真夜中を筆筒と思ふ蜻蛉かな」（三物くん・作）など健闘している。ABCに別人の句の言葉を流し込む。類型を「型」として楽しむ遊び感覚。人工頭脳の世界では名句の概念が変わつてくるかもしれない。攝津の句作りの組み合わせ方をさして三橋敏雄は「天狗俳諧」だといった程だが、幼児体験や既視感の深いところで生じるアマルガムの像……その世界は攝津幸彦ならではの幻景である。

垣間見える。ともあれ「優しく生きて」という中七から、災害によつて失われた生命の悲劇へ直結させて読んでしまうとあまりに感傷的であり「比類なく」も、どことなく虚偽感のように思えてしまつて好ましくない。やはりこの「春の地震」は大震災と直接むすびつけずに読むほうが良い気がする。あえて映像化するならば、地震の予兆としての大気ふるえが最初の「揺れ」に移行するかしんかの瞬間に暗転し、無音のエンドロールがはじまるというのが良い。

◆堀本吟

災害に斃れた人々を悼む「比類なく」と「優しく」の雰囲気は、一句全体に及ぶ。自然と人間の関係への独特な船酔い。「春」の暴力の勝利よりは必敗者の人生の方が比類なく尊い、と断じられると、奇妙にも彼らは勝ち組として、厳然と「優しく」風景の中に「生きて」くる。ネガとポジの逆転。存在のあやうさと不在のリアリティを、彼はあえて典型的に表現する。彼の作風である定型のステレオタイプな活用や、現実を洒脱にきり抜ける俳諧性を、弱者の表現の武器としている。

掲出句は、社会性俳句が用いてきた、現実社会をダイレクトに撃とうとする表現法ではない、だが、そのような関心を俳句にする一つの方法だといえないだろうか。

（俳句界）2011、5月号掲載。特集（天折の俳人）のうち・（攝津幸彦）より拙文転載。）

撰津は類型を実にうまく創造的に使える俳人であつた。その意味で例句は重要である。

攝津幸彦 比類なく優しく生きて春の地震

第七句集『鹿々集』（一九九六・ふらんす堂）



「北帰行 祖国(北朝鮮へ帰る)」
井上青龍写真集より転載

この帰還事業に關しては、初期の頃の「地上の樂園」と詠われ希望に満ちて出国した時期と、実際に北で暮ら

いま私の手元に一九八四年に宝島社から発行されたムック形式のガイドブック『朝鮮・韓国を知る本』がある。朝鮮(韓)半島にある二つの国家を紹介する時、私が物心ついて本格的に読書を始めた一九七〇年代からしばらく、ほとんどが朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の次に韓国(大韓民国)が表記されていた。しかも「韓国」というようにわざわざ括弧に入れるメディアも見受けられた。当時の韓国はアメリカの傀儡政権であり独裁国家であるから、朝鮮半島を代表する国家のひとつとして容認しない、という政治的態度を表したものだ(現在では韓国・朝鮮の順が定着している)。

映画「かぞくのくに」(梁英姫監督)を観た。在日朝鮮人の北朝鮮への帰還事業(1959-1984)との関わりが描かれている。ヤン監督はすでに在日朝鮮人である自分の家族のことを描いたドキュメンタリー映画「ディア・ピョンヤン」(2005)「愛しきソナ」(2006)を製作して内外の評価を得ている。「かぞくのくに」は、自分の家族がたどった軌跡をもとに作られた劇映画である。この映画では、総連(在日朝鮮人総聯合会幹部とおもわれる父、喫茶店を経営して家計を助ける母、朝鮮語を学校で教える娘のもとに、帰還事業で北朝鮮に渡った兄が、手術のために一時的に日本に戻ってくる様子を描いたものである。

北朝鮮に帰還した ひとびとのこと……

した日朝鮮人(約九万人)が厳しい生活を強いられるという現実とが、あまりにも大きなギャップであるために、いまでは否定的に語られることが多い。帰還した人たちの中には、日本人妻といった日本国籍の人も約六千人いて、生活が困窮したり差別されたりで脱北した人もいる。

このコラムの左上の写真に、映画の一場面ではなく、写真家・井上青龍(1927-1988)の作品を紹介した。青龍は一九六五年から翌年にかけて新潟に赴き、帰還船で出航する人たちを写真に収めている。この当時は、帰還事業を肯定的に描いた映画「キューポラのある街」(浦山桐郎監督)が封切られた時期(1963)であると共に、北朝鮮に帰還した後の現実を暴露する内容の本が出版されたり、現地からの現状を知らせる手紙が日本に届くなどといった、正・反の評価がないままとなり始めていたきわどい時期であったのだ。そうした緊迫した状況下で、青龍はひたすら人を直視してシャッターを切り続けていた。まるで在日の人たちの帰還にかける心の揺れやきわどさそのものを見据えて撮影しているかのようにも見て取れるのだ。

映画「かぞくのくに」の話にもどそう。北朝鮮から一時帰還した兄であったが、北での生活のことはほとんど語らない。実家の前には北から派遣された情報部員が家内の会話の盗聴を含めて監視を続けている。(ヤン監督によると、北朝鮮に渡った兄三人のうち一人が日本に戻った時はこうした北からの情報部員は存在せず、日本の公安による監視が目立っていたそうである)。その兄の寡黙の重さが北朝鮮の現実をよく表している、俳優たちの好演もあいまって、見応えのある映画になっている。

今や帰還事業を肯定的に見る言説は殆ど見受けなくなつたが、北朝鮮の現指導者である金正恩(朝鮮)第一書記の母は、高英姫。大阪生まれで帰還事業で北に渡った女性である。高英姫は済州島が出自で、百済王朝の末裔であるとも言われている。こうした情報を少し違った角度から見ると、金正恩(朝鮮)第一書記は(大阪二世)であり、現韓国大統領である李明博(李明博)は大阪生まれの(大阪一世)であることから、朝鮮半島の両首脳はいずれも大阪と深い縁があると言えるのである。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.74

めらんじゅ

2012年08月18日 通巻74号
発行所/月刊『Mélange』編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集人/大橋愛由等(『Mélange』同人)
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円(税込)